

日本丸の保存活用について

昭和 45 年卒 庄司邦昭

横浜の桜木町駅からみなとみらい地区に動く歩道を進むと右手にみえる練習帆船「日本丸」は 830,231 人の署名活動により 1983 年（昭和 58 年）8 月 31 日に横浜への誘致が決定した。1984 年（昭和 59 年）9 月 16 日には 2 代目の日本丸の就航にともない、初代日本丸は練習船としての用途を廃止した。その後、改修工事が行なわれ、日本丸を平水区域を航行する練習帆船として、船籍を横浜港に移し、1985 年（昭和 60 年）4 月 28 日に一般公開が始まった。以後、入場者数は 2014 年（平成 26 年）までに 4,934,616 人を数える。私が勤務していた東京商船大学において、学部の 4 年生が終了した後、6 か月間は日本丸か海王丸の帆船による乗船実習があり、ハワイ、アメリカ西海岸、場合によってはアメリカ東海岸への航海を行っていた。学生からは親しみを込めて「ポンマル」と呼ばれていた。1930 年（昭和 5 年）に建造された総トン数 2284GT の 4 本マストバーク型練習帆船「日本丸」が 2017 年（平成 29 年）に国の重要文化財として指定される運びになった。船として、徳島藩御召鯨船「千山丸」、燈台巡視船「明治丸」、日本郵船の貨客船「氷川丸」について 4 隻目の指定となった。この保存活動に多少、関わったのでその状況をここに示す。



船尾の操舵輪（1991 年 11 月 26 日）



船内の実習生居住区画（1991年11月26日）

私が、日本丸の保存活動に参加したのは、平成22年7月に、帆船日本丸保存活用検討委員会の委員長として会議に参加したときからである。このときには、日本郵船の氷川丸船長の金谷範夫氏、横浜シティガイド協会副会長の嶋田晶子氏、横浜国立大学教授の高見沢実氏、横浜こどもマリンスクール代表の山本一秋氏が委員として参加していただき、日本丸の価値について確認するとともに、次のような目標を提言した。

(1) 保存の目安として、建造年が帆船日本丸と同じ昭和5年であり、同じく横浜港のシンボルである「氷川丸」と同様に100年を目標とする。

(2) 帆船日本丸の船員教育をはじめ、横浜港誘致後の青少年育成など「人を育ててきた」歴史と価値を引き継いでいくために、現在、実施している海洋教室や総帆展帆等の事業を引き続き行うことが望まれる。

については、可能な限り、船体をこれらの事業が実施可能な状態で維持する。

帆船日本丸の保存については、所有者である横浜市が、これまでの経緯をふまえ、責任を持って適切な処置をとるべきだと考える。

まずは、上記の目標達成に向け、今後20年間の整備計画を船舶修理の専門家などの意見を取り入れて策定し、計画的な維持補修に取り組む体制を整えるべきである。

また、帆船日本丸の保存について、市民の理解を十分に得ることが肝要である。市民に帆船日本丸を支援、応援する気持ちを持ってもらうことができなければ、いかなる保存計画も無意味なものとなるだろう。

帆船日本丸保存活用検討委員会は、このような提言書を、横浜市の港湾局長に提出した。

2015年(平成27年)4月29日には帆船日本丸公開30周年記念の式典が挙行された。

式典では市立戸部小学校児童による横浜市歌斉唱、主催者挨拶、横浜市副市長、横浜市会副議長、国土交通省海事局長、(独)航海訓練所理事長による来賓祝辞、市立戸部小学校児童による祝いの鐘、感謝状贈呈、海上保安庁音楽隊による記念演奏が行なわれた。

この頃から、帆船日本丸は国の重要文化財指定へ向けて動き出した。そのためには、文化財としての価値を技術史的、工学的に検証できるような、科学的な論文が求められた。ちょうどその頃、日本船舶海洋工学会に造船技術、文化の保存という、オーガナイズドセッションが、横浜国立大学の平山次清先生(昭和44年卒)、大阪大学の内藤林先生、九州大学の新開明二先生の提唱で作られた。2015年の春季講演会で、海事遺産としての帆船初代日本丸の特徴について、と題して庄司(昭和45年卒)が発表した。翌2016年の春季講演会では、角洋一先生(昭和46年卒)と庄司で日本丸の保存に関するオーガナイズドセッションを企画した。その内容をほぼ踏襲して、2016年10月1日(土)に日本丸訓練センターで「帆船日本丸保存シンポジウム」～進水100年を目指す帆船日本丸の保存について考える～を実施した。日本丸に関するいくつかの資料に関しては、旧職員の寶田直之助先生や鳥海憲彦氏(昭和50年卒)にご協力いただいた。また、鳥海氏は柳原良平氏が初代会長を務めた帆船日本丸友の会の代表幹事として活動してくださっている。そのほか、日本丸の保存活用については、総帆展帆のボランティア、ガイドボランティアなど多くの協力により支えられている。

このような経緯を経て、2017年に国の重要文化財の指定を受ける運びとなったことは大変喜ばしいことである。さらに2017年の日本船舶海洋工学会が創立120周年記念事業として新たに企画された、「ふね遺産」としても認定される運びとなったことは弘陵造船航空会の一員として大変嬉しく思っている。



2015年4月29日（昭和の日）